FINAL・LAP

yuutanobu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＦＩＮＡＬ・ＬＡＰ

【Ｎコード】
Ｎ１３８６Ｌ

【作者名】
ｙｕｕｔａｎｏｂｕ

【あらすじ】
細川大は天才Ｆ１レーサー。
ルーキーイヤーで日本人ドライバー初の勝利をあげるとこちらもルーキーラルフ・シュナイダーとチャンピオンを争う。
そして戦いは最終戦鈴鹿のファイナルラップに突入していた。

Ｓｅａｓｏｎ１　雨の鈴鹿　世界最速のサムライ（前書き）

※この小説には実際の企業や団体とは一切関係ありません。
本人はＦ１の知識は浅くまた初投稿なので文才も低いので過度の期待はご遠慮ください。

Ｓｅａｓｏｎ１　雨の鈴鹿　世界最速のサムライ

赤と白の閃光が大雨の中ホームストレートを横切っていく。

Ｆ１第１８戦鈴鹿での日本ＧＰはファイナルラップに突入した。

前を行くのがフェラーリのラルフ・シュナイダー、ミハエル・シューマッハが自ら後継者と認めた「新皇帝」だ。

後を追うのがホンダの細川大、アグレッシブなオーバーテイクを狙う姿勢や切れ味鋭い走りから「サムライ」と呼ばれている日本人ドライバーだ。

二人はここまで同ポイント、この最終戦を勝った方がワールドチャンピオンに輝くというドラマティックな展開に詰め掛けた１５万人以上のギャラリーの盛り上がりも最高潮に達していた。

まずホームストレートでスリップから抜け出したダイのマシンがアウトからラルフのマシンに仕掛けていったが、ラルフはしっかりとブロックラインをとりダイのマシンを阻む。

「クッソもう後がねえ…この先は…仕掛けるとしたら中盤のヘアピ

ンだ！！雨の上にタイヤもズルズルだけど絶対にこのファイナルラップで逆転してやるッッ」

「勝った！！ホームストレートをからの一コーナーを押さえれば、難しい鈴鹿のパッシングポイントはヘアピンだけ、ダイホソカワ、残念だがボクの勝ちだ！！」

二台のマシンはダンロップコーナーを抜け、テグナーカーブへ、この中速コーナーをいかにスピードをのせたまま抜けるかで二人の決戦の場であるヘアピンに大きく響いてくるのだ。

二人は繊細なペダルワークで理想的なラインでテグナーカーブを抜け、異次元のスピードでヘアピン前のホームストレートに突入していく。

このストレートで２００キロ後半のスピードを出し、ヘアピンに突入する。

「ここでミスったら終わりだ、絶対に抜くッッ」

「キミには負けないッ、ボクがチャンピオンだッッ」

まるでチキンレースを見ているかのようなブレーキング勝負だ。二

人とも限界までブレーキを踏むのをこらえ、ここしかないというタイミングでガツンと踏みつける。

一気に２００キロ台から９０キロ台までスピードが落ち、すさまじいＧで体が吹き飛ばされそうになる中二人はマシンをコントロールしてヘアピンをクリアしていく。

前にでていたのラルフだった。ダイは突っ込みでは勝っていたが、その分わずかにラインを外してしまったのだ。

「勝ったもう後はゴールへ走りきるだけだ」

ラルフは勝利を確信していた、しかしダイはまだ諦めていなかった。

「まだ終わったわけじゃねえ、絶対最後まで諦めない！！」

２００Ｒとスプーンコーナーを抜け、二台は鈴鹿最大の見せ場１３０Ｒに突入して行く。

観衆からどよめきがあがる、ここでダイは全開のまま突っ込んだのだ。

「クレイジー！！死ぬ気かダイホソカワ」

並びかけらた瞬間ラルフも驚きを感じていた。

晴れはまだしもそれほど雨の１３０Ｒで全開は自殺行為だったのだ。

「いける、曲がれる、なんだかわかんねーけど、ステアからコイツがイけるっていうのが伝わってくる！！」

「曲がりきっただとォ」

奇跡的に曲がりきったダイのマシンは立ち上がりでわずかに前にラルフに出られるも、フロントノーズをねじこんだまま最終シケインに進入した。

イン側はダイだった、二度インとアウトが入れ替わるため最終的にインはダイ。

ホームストレートにダイがトップで戻りチェッカーフラッグを受けた。

歓声が爆発した。

「ダイダイダイ」の大コール。

観衆に向けダイは何度もこぶしを突き上げた。

ウイニングランを終えマシンを降りダイはチームクルーと抱き合い喜びを分かち合う。

「日本人ドライバーがホンダエンジンでチャンピオンになるなんて…本田宗一郎さんも天国でよろこんでいるでしょう」

「ホンダスピリッツを世界に見せ付けることができて本当に良かった」

殺到する取材陣にそんな言葉を言いながら、ホンダチームはみんな泣いていた。

そしてダイは表彰式に向かう。

ポディウムの頂点に日の丸が掲げられ、新チャンピオン「細川大」の名前がコールされダイはトロフィーを高く誇らしげに掲げた。

世界最速のサムライがここに誕生した。

Ｓｅａｓｏｎ１　雨の鈴鹿　世界最速のサムライ（後書き）

初めて小説を書きました。

最初にも書いたとおりＦ１は見るのが好きで全く知識もなくサーキットの特徴とかも反映させることはできないかもしれませんが（一応調べてます）できるだけ突っ込みはなしで。

いきなりチャンピオン獲ってしまったけどちゃんと続きありますよ～次回から王者編です。

できたら感想やアドバイスいただけたら嬉しいです。

頭文字Ｄやバリバリ伝説などの作品に影響されすぎだろ（笑）っていう突っ込みも無しで。

Ｓｅａｓｏｎ２～王者編１　新たなライバル

あの伝説となった鈴鹿の激闘から４ヶ月…

ダイは新シーズンの開幕に向けた最後の全チームの合同テストが行われる、バルセロナのカタロニアサーキットにやってきていた。

いよいよ日本人がＦ１チャンピオンとして望む新シーズンが始まるのだ。

ダイはガレージにやってくると、チームクルーとセッティングの打ち合わせをして、メカニック兼マネージャーの野澤さんと外にでた。

チャンピオンの自分が姿を現すとプレス達が群がってくると思っていたのだが、なぜかプレス達は目の前のトヨタチームの所に群がっていた。

「あれ？野澤さん、やたらトヨタの所にプレスがいねーか？」

「知らなかったのか？まあ決まったのが先週だからな。トヨタチームは今年からスーパールーキーの日本人が走るんだぞ」

「へぇ、そーなのか。で、どんなヤツなんだ？」

「名前は海堂竜。去年１９歳のルーキーながらフォーミュラーニッポンを全戦全勝。海外Ｆ３のスポット参戦も３戦３勝。Ｆ１チャンピオンになったお前以上の天才と言われてるんだ」

「そんなヤツならちょっと挨拶していかないとな」

ダイはプレスが群がるトヨタチームの方へ歩み寄っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1386l/

FINAL・LAP

2010年10月22日00時58分発行